

児童における孤独感への対処方略が心理的適応に及ぼす影響

—感情の動機づけ機能に着目して—

筑波大学大学院 村上達也

筑波大学大学院 西村多久磨

Influence of coping strategies with loneliness on psychological adjustment in children : Focus on motivational function of emotion

Institute of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba MURAKAMI, Tatsuya
Institute of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba NISHIMURA, Takuma

要 約

本研究の目的は、児童の孤独感に対する対処方略を明らかにすること、その孤独感に対する対処方略が心理的適応に及ぼす影響を明らかにすることの2点であった。研究1では、児童用孤独感対処方略尺度を作成した。その結果、児童は、自己呈示、社会的接触、攻撃的対処、肯定的思考、一人遊び、受容的対処という6つの対処を行っていることが明らかにされた。研究2では、孤独感に対する対処方略が心理的適応に及ぼす影響を、心理的ストレスモデル (Lazarus & Folkman, 1984)を援用した「孤独感→孤独感対処→心理的適応」というモデルで検討した。その結果、肯定的思考は心理的適応にポジティブな影響を、自己呈示、攻撃的対処、受容的対処はネガティブな影響を与えていることが明らかにされた。

【キー・ワード】 孤独感, 対処方略, 児童

Abstract

The purpose of this study was to reveal coping strategies with loneliness and the influence of coping strategies with loneliness on psychological adjustment in children. In study 1, we developed the Coping with Loneliness Scale for Children (CLSC). Factor analysis of CLSC revealed 6 factors: "self-presentation," "social contact," "aggressive coping," "positive thinking," "solitary play" and "sad passivity." In Study 2, we examined the coping strategies with loneliness as the mediator between loneliness and psychological adjustment. Pass analysis indicated that positive thinking had a positive meditating effect for psychological adjustment. However, self-presentation, aggressive coping and sad passivity had a negative meditating effect for it.

【Key words】 loneliness, coping strategy, middle childhood

問題と目的

孤独感とは、“質”または“量”を問わず、何らかの社会的関係が欠如した際に生じる不快な経験であるとされる (Perlman & Peplau, 1981)。これまでの孤独感研究の多くは、青年や成人を対象にしたものであった。これは、児童は孤独感を経験しないものと考えられていたことに起因するが、海外では児童も青年や成人と同じように孤独感を経験していることが実証されて以降、児童を対象とした孤独感研究が増加している (Rothenberg, 1999)。しかし、その一方で、本邦ではいまだ児童を対象とした孤独感研究は少ない状況にある。

上述したように、本邦において児童の孤独感に関する研究数は少ないが、孤独感の本邦の子どもたちにとって大きな問題である。例えば、UNICEF (2007) の子どもの well-being に関する国際調査において、本邦では特に孤独を感じている子どもが多いことが指摘されている。この調査では 15 歳の子どものうち 29.8% が孤独を感じていることが明らかにされた。この割合は調査に参加した OECD 加盟国 25 ヶ国中、最も高く、さらに二番目に高かったアイスランドの 10.8% と比較すると問題の深刻さが伺える。また、村上・西村 (2011) では、既に小学校 4 年生から 6 年生の段階で 70.7% の児童が孤独を感じた経験があることが明らかにされており、本邦における子どもの孤独感は依然として問題であり続けているといえよう。

先行研究から、児童の孤独感は仲間からの排除、いじめ被害、攻撃性、シャイネス、反抗的行動、不登校などの不適応変数と関連していることが明らかになっている (Asher, Hymel & Renshaw, 1984; Boivin, Hymel & Bukowski, 1995; Cassidy & Asher, 1992; 前田, 1998)。したがって、孤独感はその後の適応を害するという点で問題視されており、孤独感の低減に向けた介入研究も始められている (金山・後藤・佐藤, 2002)。

しかし、孤独感をただ低減させるだけでよいのであろうか。上述したように実際に孤独を感じている児童が多い中、孤独感という不快な感情を児童に経験させないという予防的なアプローチのみならず、孤独を感じた時に、どのようにすれば不適応につながらないようにできるか、というアプローチの研究が必要であると考えられる。そもそも、孤独感の生起過程を説明する社会的欲求理論では、人は社会的関係の欠如を認知した際、孤独を感じることによって、その社会的関係の欠如を埋めるために他者との接触を動機づけられるとしている (Weiss, 1973)。また、成人の孤独感研究を精力的に行っている Cacioppo & Patrick (2008) も進化論的アプローチから、孤独感是人との接触を促すシグナルとして重要であるからこそ現代まで残っていると考察している。したがって、孤独を感じることは自然であり、また、人格形成上、孤独を感じることも重要であるという指摘 (落合, 1990) が存在することからも、孤独感を感じた際にどのようにその感情に対処するかという視点が児童の心理的適応という問題を考えるにあたって重要であると考えられよう。

このような観点から、青年や成人における孤独感の対処方略に関して、海外では Rubinstein & Shaver (1982) や Rokach & Brock (1998) が、国内では工藤 (1986)、諸井 (1989) が研究を行っている。しかし、ほとんどの研究は、孤独感対処方略の因子分析や孤独感の高低による対処方略の

違いの検討に留まり、心理的適応にどのような影響を及ぼすかに関しては検討されていない。一方、児童における孤独感の対処に関して、Besevegis & Galanaki (2010) は面接調査によって孤独感の対処方略を分類しているが、青年・成人期の研究と同様に心理的適応にどのような影響を及ぼすかに関しては検討していない。また、Besevegis & Galanaki (2010) は、児童における孤独感対処方略の研究が長らく軽視されており、今後、児童の孤独感対処に関する尺度を作成する必要があると指摘している。この要請を受けて、村上・西村 (2011) は、児童が行う孤独感への対処に着目し、自由記述調査の結果、“趣味”、“社交”、“受容”、“隠蔽”、“攻撃”、“拮抗”、“その他”の7 カテゴリーを抽出している。さらに、Murakami, Nishimura, Sakurai & Sakurai (2011) は、村上・西村 (2011) の自由記述調査の結果を基に、孤独感対処方略尺度の作成における予備的検討を行い、“攻撃的対処”、“受容的対処”、“一人遊び”、“社会的接触”、“肯定的思考”、“自己呈示”の6 因子構造から成る尺度を作成した。しかしながら、この尺度においては、一部の低位尺度の項目数が少なく、心理尺度として信頼性の面で問題が指摘された。そこで、まず本研究ではMurakami et al. (2011) の尺度を改定し、児童用孤独感方略尺度 ver.2 を作成する。

さて、上述した孤独感を感じた時に、どのように振る舞うことが適応にとって重要であるかという観点には、Lazarus & Folkman (1984) の心理的ストレスモデルの枠組みが援用できる。心理的ストレスモデルは、不快な出来事であるストレスラーに対して、それが脅威かどうかを判断し（一次評価）、脅威なものとして判断した場合、対処可能かどうかの判断（二次評価）が、その後の対処方略の選択に影響し、ストレス反応を抑制するという理論である。Lazarus & Folkman (1984) は一次評価後に感情が生起すると述べており、本研究ではその感情の1 つとして孤独感を想定する。また、Lazarus (1991) は、感情は特定の行動パターンを生起させる動機づけとなる、と述べていることから、孤独感が生起したのちに、特定の行動パターン（対処方略）を行うとして理解できる。したがって、本研究では一次評価後の感情生起に対して、孤独感を想定し、孤独を感じた時、いかに対処するかが、どのように心理的適応に対して影響を及ぼすのか、というモデルを検討する（図1）。その際、適応指標として自己価値に、不適応指標としてストレス反応に着目する。

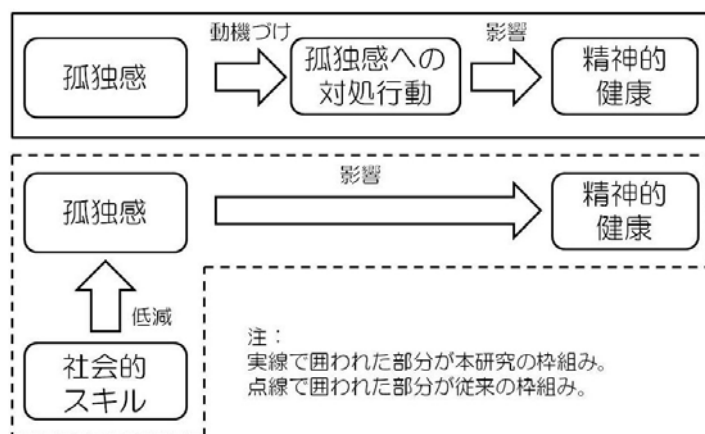


図1 従来の研究の枠組みと本研究の研究の枠組みの概念図

以上から、本研究の目的は、①児童用孤独感方略尺度の改訂版を作成すること、②「孤独感→孤独感対処→心理的適応」という孤独感対処モデルを検討すること、の 2 点を検討することである。

研究 1 児童用孤独感対処方略尺度の ver.2 の作成

目的

研究 1 の目的は、Murakami et al. (2011) で発表された児童用孤独感対処方略尺度の改訂版を作成することであった。

方法

調査協力者 公立小学校 1 校の 4 年生 132 名（男子 66 名，女子 66 名），5 年生 192 名（男子 108 名，女子 84 名），6 年生 115 名（男子 65 名，女子 50 名）の合計 439 名であった。

調査内容 児童用孤独感対処方略尺度 ver.2 の予備項目：尺度の予備項目として、Murakami et al. (2011) の尺度項目を一部修正し、計 29 項目を用意した。教示は、「新しいクラスになってから、さみしい気持ちになった時、さみしい気持ちをへらすため、あなたはどのようなふるまいをしましたか。以下の書かれているふるまいをしたことがあるかどうか教えてください。」とし、「1：まったくしなかった」、「2：あまりしなかった」、「3：少しした」、「4：よくした」の 4 件法で回答を求めた。

手続き 調査協力の得られた各学級において授業時間の一部を割いて、担任教員による一斉配布方式で実施した。フェイスシートに、自由意志の回答であること、学校の成績に一切関係がないこと、個人のプライバシーは保護されることの 3 点を明記した。

結果

因子分析の結果 児童用孤独感対処方略尺度 ver.2 の因子構造を検討するために、作成した予備項目 29 項目に対して、最尤法・Promax 回転による因子分析を行った。複数の因子に高い負荷を示した項目を除外し、因子の単純構造を基準にした結果、最終的に 6 因子解が妥当であると判断した（表 1）。

表 1 孤独感対処方略尺度 ver. 2 の因子分析結果 (最尤法・Promax 回転後)

Item	F1	F2	F3	F4	F5	F6
F1 自己呈示 (self-presentation)						
元気なふりをする	.97	.02	.04	-.06	-.05	-.14
無理をして明るくふるまうようにする	.69	.04	.01	.02	-.01	.02
ふつうなふりをする	.66	-.11	-.04	.07	.04	.02
淋しさをかくす	.57	.09	-.03	.01	-.03	.12
F2 社会的接触 (social contact)						
ほかの人(家族、友達、先生など)に話をしに行く	.02	.78	.03	.02	.01	.08
ほかの人(家族、友達、先生など)のところへ行く	.08	.78	.05	-.06	.08	-.10
ほかの人(家族、友達、先生など)に相談する	-.04	.71	-.09	.05	-.10	.08
ほかの人(家族、友達、先生など)に友達に電話やメールをする	-.06	.38	.02	.10	.03	.07
F3 攻撃的対処 (aggressive coping)						
友達にちょっかいをだしたり、嫌がるようなことをする	-.03	.00	.82	.01	.04	-.03
友達に暴力をふるう	.02	.01	.81	-.02	-.05	-.07
友達の悪口をいう	-.01	.03	.58	.04	-.10	.10
近くにある物をなげたり、こわしたりする	.02	-.04	.44	-.07	.06	.11
F4 肯定的思考 (positive thinking)						
自分で自分を、勇気づける	-.03	-.05	-.06	.89	.00	-.01
自分で元気づけたり、はげましたりする	-.01	.03	-.04	.79	-.08	.03
今度はよいこともあるだろうと考える	.04	.13	-.02	.44	.02	-.09
がんばって、おもしろいことを思い出す	.11	.06	.16	.41	.13	-.05
F5 一人遊び (solitary play)						
一人でしゅ味にしていることをする	.00	.06	-.07	.00	.76	-.01
一人で自分の好きなことをする	.02	.02	-.11	-.05	.74	.01
一人でゲームをしたり、パソコンであそんだりする	-.10	-.08	.16	-.02	.37	.06
一人で好きな物を食べる	-.04	-.04	.15	.26	.33	-.01
F6 受容的対処 (sad passivity)						
一人でおちこむ	.12	-.08	.05	-.03	.02	.64
泣く	-.13	.15	.03	-.02	-.03	.58
かなしい気分ひたる	.01	.05	.01	-.06	.05	.52
じっとたえる	.27	-.09	.00	.08	.03	.41
因子間相関						
F1	-	-.08	-.05	.35	.30	.38
F2		-	-.02	.38	.06	-.02
F3			-	-.04	.17	.17
F4				-	.32	.19
F5					-	.34

第 1 因子は、“元気なふりをする”や“無理をして明るくふるまうようにする”などの項目が高い負荷量を示したため、“自己呈示 (self-presentation)”と命名した。第 2 因子は、“ほかの人 (家族、友達、

先生など)に話をしにいく”や“ほかの人(家族、友達、先生など)のところへ行く”などの項目が高い負荷量を示したため、“社会的接触 (social contact)”と命名した。第 3 因子は、“友達にちょっかいをだしたり、嫌がるようなことをする”や“友達に暴力をふるう”などの項目が高い負荷量を示したため、“攻撃的対処 (aggressive coping)”と命名した。第 4 因子は“自分で自分を、勇気づける”や“自分で元気づけたり、はげましたりする”などの項目が高い負荷量を示したため、“肯定的思考 (positive thinking)”と命名した。第 5 因子は“一人でしゅ味にしていることをする”や“一人で自分の好きなことをする”などの項目が高い負荷量を示したため、“一人遊び (solitary play)”と命名した。第 6 因子は“一人でおちこむ”や“泣く”などの項目が高い負荷を示したため、“受容的対処 (sad passivity)”と命名した。それぞれの因子に対して高い負荷量を示している項目を下位尺度項目とし、下位尺度項目の加算平均得点を下位尺度得点として分析に用いた。孤独感対処方略尺度の各下位尺度の平均値と標準偏差を表 2 に示した。

内的一貫性の検討と下位尺度間の相関 尺度の内的一貫性を検討するために、 α 係数を算出した。その結果、自己呈示が $\alpha = .81$ 、社会的接触が $\alpha = .77$ 、攻撃的対処が $\alpha = .75$ 、肯定的思考が $\alpha = .74$ 、一人遊びが $\alpha = .64$ 、受容的対処が $\alpha = .66$ であった。以上より、一部信頼性の低い下位尺度が見られたものの、一定の内的一貫性を有していることが確認された。また、下位尺度間の α 係数および相関係数を表 2 に示した。

表 2 孤独感対処方略尺度 ver. 2 の平均値と標準偏差及び下位尺度間相関

	<i>M</i>	<i>SD</i>	α	②	③	④	⑤	⑥
① 自己呈示	2.35	0.88	.81	-.03	-.04	.29**	.21**	.37**
② 社会的接触	2.18	0.86	.77		-.02	.37**	.09	.02
③ 攻撃的対処	1.43	0.55	.75			-.03	.15**	.16**
④ 肯定的思考	2.36	0.83	.74				.27**	.15**
⑤ 一人遊び	2.45	0.78	.64					.27**
⑥ 受容的対処	1.81	0.69	.66					

** $p < .01$

各下位尺度得点の性差学年差 児童の孤独感対処方略の発達的变化および性差を検討するために、学年 (3 水準) と性別 (2 水準) による 2 要因分散分析を行った。

その結果、まず、自己呈示では、学年の主効果 ($F_{(2, 433)} = 3.16, p < .05$) と性別の主効果 ($F_{(1, 433)} = 22.67, p < .01$) が有意であり、男子よりも女子の方が有意に高い得点だった。また、学年の効果は多重比較では有意な結果は得られなかった。次に、社会的接触では性別の主効果が有意であり ($F_{(1, 433)} = 18.77, p < .01$)、男子よりも女子の方が有意に高い得点だった。また、攻撃的対処では性別の主効果が有意であり ($F_{(1, 433)} = 19.26, p < .01$)、女子よりも男子の方が有意に高い得点だった。さらに、肯定的思考では性別の主効果が有意であり ($F_{(1, 433)} = 8.87, p < .01$)、男子よりも女子の方が有意に高い得点だった。一方、一人遊び、受容的対処については、学年の主効果、性別の主効果、交互作用項いずれも有意な結果は得られなかった。学年、性ごとの孤独感対処方略尺度の平均値と標準偏差およ

び分散分析の結果を表 3 に示した。

表 3 学年、性ごとの孤独感対処方略尺度 ver. 2 の平均値と標準偏差

	4年		5年		6年		学年の 主効果	性別の 主効果	交互作用
	男子	女子	男子	女子	男子	女子			
① 自己呈示	2.00 (0.89)	2.43 (0.88)	2.27 (0.87)	2.64 (0.86)	2.23 (0.79)	2.63 (0.88)	3.16*	22.67** 男<女	0.71 <i>n.s.</i>
② 社会的接触	2.03 (0.82)	2.23 (0.89)	2.13 (0.87)	2.46 (0.87)	1.82 (0.66)	2.36 (0.90)	2.87 <i>n.s.</i>	18.77** 男<女	1.21 <i>n.s.</i>
③ 攻撃的対処	1.62 (0.68)	1.32 (0.44)	1.50 (0.61)	1.27 (0.37)	1.50 (0.55)	1.36 (0.49)	0.90 <i>n.s.</i>	19.26** 女<男	0.51 <i>n.s.</i>
④ 肯定的思考	2.26 (0.70)	2.56 (0.91)	2.26 (0.84)	2.49 (0.90)	2.21 (0.71)	2.39 (0.79)	0.62 <i>n.s.</i>	8.87** 男<女	0.19 <i>n.s.</i>
⑤ 一人遊び	2.42 (0.78)	2.39 (0.71)	2.50 (0.81)	2.36 (0.79)	2.48 (0.76)	2.56 (0.83)	0.68 <i>n.s.</i>	0.17 <i>n.s.</i>	0.76 <i>n.s.</i>
⑥ 受容的対処	1.75 (0.67)	1.87 (0.68)	1.74 (0.64)	1.96 (0.74)	1.76 (0.67)	1.81 (0.75)	0.33 <i>n.s.</i>	3.38 <i>n.s.</i>	0.57 <i>n.s.</i>

** $p < .01$, * $p < .05$

考 察

本研究によって、自己呈示、社会的接触、攻撃行動、肯定的思考、一人遊び、受容的対処の 6 因子から成る尺度が作成された。自己呈示は諸井（1989）の自己の改善に、社会的接触は Rubinstein & Shaver（1982）の社会的接触や諸井（1989）の友だちとの交流、友だちへの自己開示、家族との交流に相当すると考えられる。攻撃的対処は工藤（1986）の暴力に、一人遊びは Rubinstein & Shaver（1982）の一人活動や諸井（1989）の娯楽的活動に相当すると考えられる。受容的対処は諸井（1989）の消極的受容に相当すると考えられる。しかし、肯定的思考は諸井（1989）の自己の改善に一部重複するような項目があるものの、独自に抽出した因子であり、本研究で新たに見出された孤独感の対処方略であるといえる。ただし、肯定的思考に近い項目をもつ概念として、大竹・島井・嶋田（1998）が作成した小学生用ストレスコーピング尺度における情動的回避因子が存在する。以上より、先行研究の知見と対応した孤独感対処方略尺度が作成されたといえよう。

研究 2 孤独感対処方略と自己価値, ストレス反応との関連

目 的

研究 2 の目的は, Lazarus & Folkman (1984) の心理的ストレスモデルを援用した「孤独感→孤独感対処→心理的適応」という孤独感対処モデルを検討することであった。

方 法

調査協力者 A 県内の公立小学校 2 校の 4 年生 203 名 (男子 106 名, 女子 97 名), 5 年生 188 名 (男子 99 名, 女子 89 名), 6 年生 207 名 (男子 111 名, 女子 96 名) の合計 598 名であった。

調査内容 (1) 児童用孤独感対処方略尺度 ver.2: 研究 1 で作成した児童の孤独感対処方略を測定する尺度である。各下位尺度 4 項目, 計 24 項目から構成される。

(2) 児童用孤独感尺度: 孤独感を測定する尺度として Murakami et al. (2011) が作成した尺度を使用した。この尺度は“さみしさを感じますか”や“まわりからとりのこされていると感じますか”などの 5 項目から成るものである。教示は“それぞれの項目は, 最近のあなたの気持ちにどのくらい近いですか”とし, 「1: まったくあてはまらない」, から「4: とてもあてはまる」の 4 件法で回答を求めた。

(3) 小学生用ストレス反応尺度: 児童のストレス反応を測定する尺度として嶋田・戸ヶ崎・坂野 (1994) が作成した尺度を使用した。この尺度は, 学校場面におけるストレス反応の中でも“身体反応 (e.g., 頭がくらくらする)”や“抑うつ・不安感情 (e.g., さびしい)”, “不機嫌・怒り感情 (e.g., いらいらする)”, “無気力 (e.g., あまりがんばれない)”の 4 因子がそれぞれ 5 項目, 計 20 項目で構成されるものである。本研究では, これらの全ての項目を用いて, ストレス反応得点として扱うこととする。教示は“あなたは, このごろ, 次に書いてあるいろいろな気持ちや体の調子に, どのくらいあてはまりますか”とし, 「1: 全然あてはまらない」から「4: よくあてはまる」の 4 件法で回答を求めた。

(4) 自己価値感尺度: 児童の自己価値を測定する尺度として, Harter (1983) が作成した Self-Perception Scale を翻訳した眞榮城・菅原・酒井・菅原 (2007) の児童用自己知覚尺度の下位尺度である“自己価値”を測定する 6 項目を使用した。教示は“以下の項目についてあなたはどのくらいあてはまりますか”とし, 「1: まったくそう思わない」, から「4: とてもそう思う」の 4 件法で回答を求めた。

手続き 研究 1 と同様であった。

結 果

児童用孤独感対処方略尺度 ver.2 の確認的因子分析の結果 まず, 児童用孤独感対処方略尺度 ver.2

の交差妥当性の検討のために、確認的因子分析（6 因子モデル）を行った。その結果、GFI=.89, AGFI=.87, RMSEA=.05 であり概ね満足できる値であった。

各尺度の信頼性係数 各尺度の内的一貫性を検討するために、Cronbach の α 係数を算出した。その結果、まず、孤独感対処方略の下位尺度については、自己呈示が $\alpha=.83$, 社会的接触が $\alpha=.75$, 攻撃的対処が $\alpha=.72$, 肯定的思考が $\alpha=.73$, 一人遊びが $\alpha=.67$, 受容的対処が $\alpha=.75$ であった。また、孤独感 $\alpha=.81$, 自己価値 $\alpha=.73$, ストレス反応は $\alpha=.91$ であった。以上より、一部信頼性の低い下位尺度が見られたものの各尺度は一定の内的一貫性を有していることが確認された。

パス解析モデル まず、孤独感得点が 1 であった対象者は、孤独感を感じなかった子どもであると見なし、孤独感に対する対処の必要がないため、本研究のモデルから除外することとした。その結果 323 名（男子 172 名, 女子 151 名; 54.2%）を以降の分析に用いた。323 名における孤独感対処方略, 孤独感, ストレス反応, 自己価値の平均値, 標準偏差および尺度間の相関関係を表 4 に示した。

次に Lazarus & Folkman (1984) の心理的ストレスモデルを参照し、孤独感→孤独感対処方略→心理的適応（ストレス反応・自己価値）というパスモデルを重回帰分析の繰り返しによって作成した。結果を図 2 に示した。

まず孤独感から全ての孤独感対処方略に対して正のパスが確認された ($\beta = .31 \sim .69, p < .01$)。次に、孤独感対処方略からストレス反応に対しては、肯定的思考がストレス反応を抑制していること ($\beta = -.12, p < .05$) が明らかにされたが、攻撃的対処 ($\beta = .22, p < .01$) および受容的対処 ($\beta = .33, p < .01$) はストレス反応を助長してしまっていることが明らかにされた。一方、孤独感対処方略から自己価値に対しては、まず肯定的思考が自己価値を高めている ($\beta = .21, p < .01$) が、自己呈示 ($\beta = -.16, p < .05$) や受容的対処 ($\beta = -.21, p < .01$) が自己価値を低めていることも明らかにされた。なお、孤独感は直接的に自己価値を低めること ($\beta = -.22, p < .01$)、ストレス反応を高めていること ($\beta = .16, p < .01$) も明らかにされた。

表 4 孤独感対処方略尺度 ver. 2 の平均値と標準偏差及び下位尺度間相関

	<i>M</i>	<i>SD</i>	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
① 自己呈示	2.17	0.89	.21**	.23**	.44**	.39**	.62**	.50**	.41**	-.31**
② 社会的接触	2.02	0.80	-	.30**	.40**	.27**	.28**	.33**	.23**	-.07
③ 攻撃的対処	1.52	0.59		-	.24**	.41**	.43**	.45**	.47**	-.17**
④ 肯定的思考	2.13	0.78			-	.41**	.37**	.31**	.18**	-.00
⑤ 一人遊び	2.18	0.81				-	.44**	.45**	.38**	-.19**
⑥ 受容的対処	1.92	0.81					-	.69**	.59**	-.39**
⑦ 孤独感	1.77	0.61						-	.54**	-.38**
⑧ ストレス反応	1.73	0.58							-	-.43**
⑨ 自己価値	2.51	0.66								-

** $p < .01$

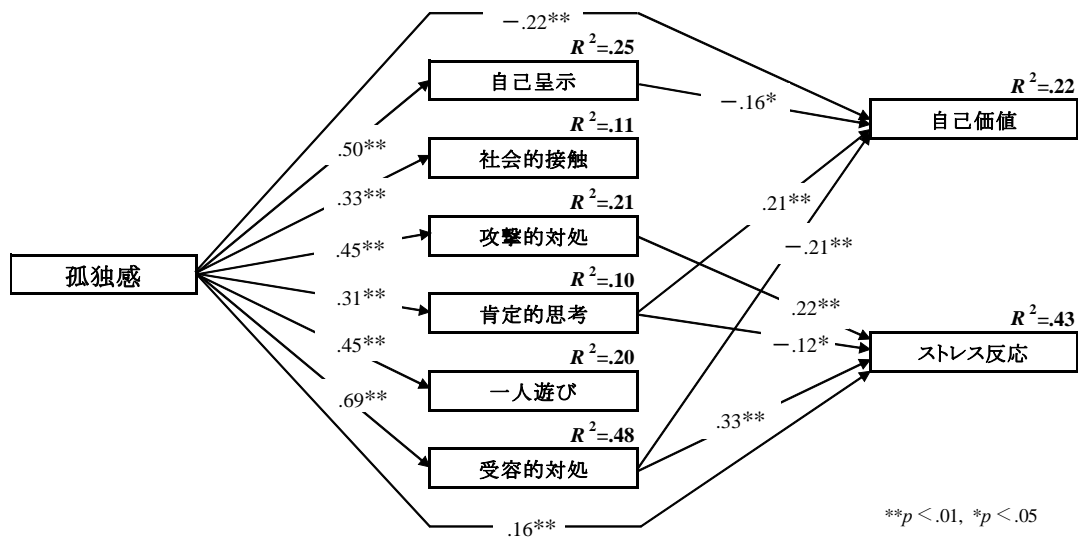


図 2 孤独感対処モデルのパス解析の結果

考 察

パス解析において作成したモデルの構造は、孤独感→孤独感対処方略→心理的適応となっている。これは子どもが孤独感を感じた時、そのさみしさを低減するためにどう振る舞うか、その結果、心理的適応はどのような影響を受けるのかというモデル構造である。本研究の結果、特に孤独感から全ての孤独感対処方略に正のパスが得られた点から、基本的には、子どもは孤独感を感じた時に、様々な対処方略を選択するという自然なプロセスを身に付けていると考えられ、研究 1 で明らかにされた孤独感対処方略は実際に孤独を感じた際に、使用される方略であることが確認された。

しかし、その対処方略が有効か否かといった点については、様々な結果が得られた。まず、自己価値を高め、ストレス反応を抑制する肯定的思考は最も望ましい対処方略であるといえるであろう。肯定的思考は、ストレス研究における情動回避コーピングと類似した項目であることは先に述べたが、回避型コーピングはストレスコーピング研究において、否定的に捉えられることも多い(三浦・上里, 1999)。しかし、加藤(2001)や森田(2008)は対人ストレス場面においては、回避型コーピングがストレス低減において有効であることを示していることを鑑みれば、本研究も同様に対人場面において、回避型コーピングに類似している肯定的思考が有効であったと解釈できる。一方、自己価値を低めストレス反応を助長する受容的対処や自己価値を低める自己呈示、さらにはストレス反応を高める攻撃的対処は、本研究の結果から、不適切な対処方略でことが示された。奇しくも、これらの孤独感からのパス係数は、他の対処方略よりも相対的に高く、児童においては自然に選択されやすいものであることが推察される。

また、従来の研究(工藤, 1986; 諸井, 1989)で有効な孤独感対処とされている社会的接触に関しては、自己価値・ストレス反応に関して有意なパスが得られなかった。これは金山・佐藤・佐藤(2000)

において孤独児は社会的スキルが低いことが明らかにされていることから、孤独感を感じた児童が社会的接触を持ったとしても適切な関わりが出来ないために、有効な対処方略になりえないのではないかと考えられる。

したがって、孤独感を感じた際のより良い対処方略を促進するために、肯定的思考のような対処をどのようにすれば促進できるか、あるいは、受容的対処や自己呈示対処、攻撃的対処をどのようにすれば低減できるか、さらには社会的接触を有効に働かせるためには、どのようにすれば良いのか、が今後の課題となろう。

全体的考察

研究 1 では、児童が孤独を感じた際に、どのようにしてその孤独な気持ちを低減するかについて、測定する尺度を作成した。その結果、自己呈示、社会的接触、攻撃行動、肯定的思考、一人遊び、受容的対処の 6 つの対処方略が得られた。

研究 2 では、Lazarus & Folkman (1984) の心理的ストレスモデルに基づきパスモデルを作成した結果、肯定的思考が適応的な対処方略であることが明らかにされた。一方、孤独感対処方略の中でも、受容的対処や自己呈示、攻撃的対処は不適応的な対処方略であることが明らかにされた。こうした結果は、孤独感を減らそうと試みたものの結果として二次的な被害（自己価値の低下、ストレス反応の経験）をもたらされたものと解釈することができ、今後は、上述した不適応的な対処方略を選択しまいがちな児童への教育的な援助が必要となるであろう。また、孤独感はその後の不適応を予測するという見解についても本研究の結果から、説得的な解釈が可能になったものと思われる。すなわち、孤独感を感じた際には不適切な対処方略を選択してしまい、その結果、後の不適応への繋がるというプロセスに基づく解釈である。こうした点は、本研究が孤独感研究において大いに貢献した点であると言える。

しかしながら、本研究には以下に示す限界がある。第一に、本研究のサンプルは 2 校の公立小学校であり、結果の一般化には慎重になる必要がある。特に、孤独感の生起は学校や学級の状況にも関係しているものと考えられ、孤独感を感じやすい学級や感じにくい学級など多様な学級が存在するものと思われる。こうした結果を踏まえ、今後は大規模サンプルに基づき調査が必要であると考えられるが、クラス間の影響を取り除いた上で分析が可能な階層線形モデルなども組み込み検討する必要がある。第二に、研究 2 については横断調査による結果であるという点である。本来、因果関係を想定したパス解析では、縦断調査による検討が望ましく、この点は本研究の限界であると同時に今後の課題であるといえる。例えば、学期のはじめと最後に、孤独感とストレス反応、自己価値を測定し、その間に、孤独感対処方略を測定するといったデザインに基づく研究が望まれよう。

引用文献

Asher, S. R., Hymel, S., & Renshaw, P. (1984). Loneliness in children, *Child Development*, 55,

1456-1464.

- Besevegis, E., & Galanaki, E.P. (2010). Coping with loneliness in childhood. *European Journal of Developmental Psychology*, **7**, 653-673.
- Boivin, M., Hymel, S., & Bukowski, W. M. (1995). The role of social withdrawal, peer rejection, and victimization by peers in predicting loneliness and depressed mood in childhood. *Development and Psychopathology*, **7**, 765-785.
- Cacioppo, J. T., & Patrick, B. (2008). *Loneliness: human nature and the need for social connection*. New York: W. W. Norton & Company.
- Cassidy, J., & Asher, S. R. (1992). Loneliness and peer relations in young children. *Child Development*, **63**, 350-365.
- 金山元春・後藤吉道・佐藤正二 (2002). 孤独感が高い児童に及ぼす学級単位の集団社会的スキル訓練の効果 宮崎大学教育文化学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, **9**, 1-10.
- 金山元春・佐藤正二・佐藤容子 (2000). 児童の社会的スキルと孤独感 宮崎大学教育文化学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, **7**, 73-81.
- 工藤 力 (1986). 思春期の孤独感に関する研究 心理学研究, **57**, 293-299.
- Lazarus, R. S. (1991). *Emotion and Adaptation*. New York: Oxford University Press
- Lazarus, R. S. & Folkman, S. (1984). *Stress, Appraisal, and Coping*. New York: Springer.
- 前田健一 (1998). 子どもの孤独感と行動特徴の変化に関する縦断的研究—ソシオメトリック地位維持と地位変動群の比較— 教育心理学研究, **46**, 377-386.
- 諸井克英 (1989). 大学生における孤独感と対処方略 実験社会心理学研究, **29**, 141-151.
- 眞榮城和美・菅原ますみ・酒井厚・菅原健介 (2007). 改訂・自己知覚尺度日本版の作成—児童版・青年版・大学生版を対象として— 心理学研究, **78**, 182-188.
- 三浦正江・上里一郎 (1999). 中学生の学業における心理ストレス—高校受験期に実施した調査研究から— ヒューマンサイエンスリサーチ, **8**, 87-102.
- 村上達也・西村多久磨 (2012). 児童における孤独感への対処 (中間報告) 発達研究, **26**, 203-208.
- Murakami, T., Nishimura, T., Sakurai, S., & Sakurai, T. (2011). Coping with loneliness among Japanese elementary school students. The 2011 TERA International Conference on Education, Kaohsiung, Taiwan.
- 落合良行 (1990). 青年期における孤独感の構造, 風間書房
- Perlman, D., & Peplau, L. A. (1981). Toward a social psychology of loneliness. In R. Gilmour & S. Duck. (Eds.), *Personal relationships : 3. Personal relationships in disorder*. London : Academic Press.
- Rokach, A. & Brock, H. (1998). Coping with loneliness. *Journal of Psychology*, **132**, 107-128.
- Rotenberg, K. J. (1999). Childhood and adolescent loneliness: An introduction. In K. J. Rotenberg., & S. Hymel. (Eds.), *Loneliness in childhood and adolescence*. New York: Cambridge University Press. pp. 11-33.

Rubenstein, C. M., & Shaver, P. (1982). The experience of loneliness. In L. A. Peplau & D. Perlman (Eds.), *Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy*. New York: Wiley. pp. 206–223.

嶋田洋徳・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1994). 小学生用ストレス反応尺度の開発 健康心理学研究, **7**, 16-58.

UNICEF (2007). An overview of child well-being in rich countries: A comprehensive assessment of the lives and well-being of children and adolescents in the economically advanced nations. *Innocenti Report Card 7, 2007*. UNICEF Innocenti Research Center.

Weiss, R. S. (1973). *Loneliness: The experience of emotional and social isolation*. Cambridge, MA: MIT Press.

